

近大読舒会

本を媒介に他者とつながり世界を広げる

建築学部建築学科 教授 鈴木 毅

本について話ができる場を

近大読舒会は2018年に発足した読書サークルである。現在メンバーは約10名。2019年度からはアクトプロジェクトに加えていただきACT417を拠点として読書会をはじめとする本に関連する活動をしている。

読舒会の「舒」は「シヨ」と読む。メンバーのTa君が見つめてきた漢字で「ゆったり」「ひろげる」などの意味があるということで採用された。初代表になったN君によれば、近大読舒会の強みは「ゆるさ」とのことなのでふさわしいネーミングだと思う。

きっかけは、ゼミ4年のN君とM君が本好きだったこと。聞けば本について話をしたいが、これまで本好きの人に会う機会がなかったという。ではサークルをつくらうということになり、担当していた2年の講義で呼びかけたところS君、Oさん、Aさん他数名の希望者があった。基礎ゼミで声をかけた1年のSo君も加わって2018年の11月に研究室で第一回目の集まりを開いた。建築学部の学生が多い中、知り合いだった文芸学部のTa君や国際学部のRさんも加わってくれた。

まずは最近読んだお勧め本の紹介からはじめた。それぞれが好きな本について語るだけ



写真1 初期の本の紹介会の様子

で楽しかった。お互いの読み方、本の買い方の違いが面白かった。最近の学生がどんな本を読んでいるか全く不案内だったのであげられる本の数々は新鮮だった。

鴨川ホルモー読書会 + 京都ツアー 2019.2

なんか好きな本を紹介する会をしたあと、森見登美彦さんの「鴨川ホルモー」を課題図書とした読書会を行った。この機会に小説の舞台に行ってみようという京都聖地巡礼ツアーをアートを決行し、代替りの儀が行われる（とされる）吉田神社、鴨川デルタなどをめぐった。ついでに本好きの聖地である恵文社一乗寺店や渋すぎる古書店アスタルテ書房も訪れた。読書は街歩きにもつながるのである。



写真2 恵文社一乗寺店前にて

NOAHを読む 2019.10.4

ご存知のとおりACTビブリオシアターの「NOAH」「DONDEN」は松岡正剛氏による近大の大きな財産である。学外からの本に詳しい知人を案内すると、この本の並びにこの本ですか、と食い入るように見つめ、棚から動かなくなってしまうのが常である。しかし、残念ながらこの棚の価値は学生に十分伝わっているとは言い難い。

そこで「NOAH」「DONDEN」を読むを企画した。まずはNOAH19の「創意のエンジニアリング」の棚しぼりで、興味をもった本を選び紹介する読書会にした。この時は、学生、建築学部教員に加えて、棚を担当されている職員の方々も参加して下さったのでたいへん盛り上がった。

ヨーロッパの列車、アフォードダンス、職人、ランドスケープ…。この棚にそんな本あったのかという本が何冊も紹介されるのである。自分では目に入ってこないものに気付かされるという点で、このやり方はたいへん面白かった。おかげで、私自身もこのユニークな分類について少し理解が深まった気がする。



写真3 NOAH19を読む

阪上君、パリに行くならこの本を 2020.8.6

パリ・ラヴィレット建築大学に留学することがきまった大学院生の阪上君の壮行会をかねた読書会。タイトルのとおり留学前に読んでおくと良い本をお勧めする企画である。

この時は学生だけでなく、指導教員でポルトガルに留学した宮部浩幸先生、フランス留学経験のある関川華先生も参加して下さった。推薦本とともに説明されるお二人のアドバイス（たとえばテーブルマナー）はたいへん興味深く、阪上君だけでなく留学を考えている下級生にも参考になったと思う。学生達がパリに行くならと知恵をしぼった推薦本の数々も興味深かった。この企画が成立したことでなんでも読書会にできることを確信した。

まちの読書会とのコラボ

ながせのながや読書会 2019.5.28

長瀬駅近くの、長屋をリノベーションした地域サロン「ながせのながや」を拠点とする読書会メンバーを招いた企画。リノベ・運営に関わる学生団体「あきばこ家」のメンバーを含め12名が参加。終了後も学生が地域の方々とずっと話をしていた姿が印象的だった。

ぶらりまちライブラリー 2019.6.17

北浜の「シユール・ムジユール デサキ」、味原町の「ファレ・ティプア」など、まちライブラリーの主催者が月に一度順番にそれぞれのライブラリーで開催する読書会。テーマ（漢字一文字）にふさわしい本を持ち寄って紹介しあう形式で、参加者は一番読みたい本を選び次回までに読んでくるのが原則。特別企画としてACTにお招きして開催した。テーマは私が人の「居方」を研究していることもあり「居」。本の読み手が揃うぶらりのメンバーからの推薦本はさすがというばかりだった。

近大読舒会× simple 読書会 2020.2.8

大阪で長く定期的に活動されている simple 読書会とのコラボ。読舒会メンバーのN君（卒業論文は読書会がテーマ）が独自に交渉してくれて実現したもの。この時はラーニングコモンズのテーブルを6つ使い、各テーブル社会人約5名に学生1～2人という贅沢な環境で、私の1冊（フリージャンル）を紹介しあった。私も参加したテーブルでは主催者さんはじめ、こんなハードな本を読んでいる社会人が沢山いるのだとたいへん刺激になった。（会の様子は以下に掲載いただいています。<http://osakacafedoku.com>）



写真4 simple 読書会×近大読舒会

普段、親と教員とバイト先の人以外の大人に接する機会の少ない学生にとって、こうしたまちのグループとの合同読書会は貴重な機会である。多くの学生にとって（いや私にとっても）手ぶらで初対面の人、しかも年齢も性別も仕事の内容も想像できない人と話するのはなかなかハードルが高いが、本があり、それを互いに紹介するという形式だと話はずっとしやすくなり会話も続くのである。本には人を媒介する力があるのだ。

zoom で読書会 2020.4.25

新型コロナによってリアルに集まる活動が難しくなった中、講義で多少慣れてきた zoom を使ってやってみようという学生が企画した読書会。アナウンスしたところ、国際、経営、理工、法、総合社会、薬学、建築、文芸、農学部とほぼ全ての学部から申し込みがあった。学年も1年生から大学院生まで、その数なんと50名以上。どう運営するのかとメンバーは悩んだが、まあ一度全員でやってみようということで迎えた当日はZoomの画面におさまる20数名の参加者でちょうどよかった（読書会メンバーが5名。男女比2:1）。

参加学生の読書歴と志向は本当に様々だった。ほとんど本を読んだことはないけどコロナで暇なのでできましたという学生から、ビブリオバトル常連のつわものまで。紹介されたのもビジネス本からマンガやディープなファンタジー、学生定番の森見登美彦や西加奈子、朝井リョウの最新刊から、カミュ、ディケンズなどの古典まで実に幅が広がった。

オンラインでもなんとか読書会はできる、そしてオンラインなら農学部など他キャンパ



写真5 Zoomで読書会

スの学生も参加できることに気付いたのが大きな収穫だった。

ハチミツとクローバーを語り尽くそう 2020.5.23

オンライン読書会いけるということで次に企画したのが、羽海野チカさんの青春漫画の古典「ハチミツとクローバー」（通称ハチクロ）の読書会である。ポスターには未読の人・男子・聞き手も大歓迎と書いた。

未読の人、聞き手も募集しているのがポイントである。この企画の狙いは一つの作品を対象にした読書会だった。ここまで何度も「読書会」と書いてきたが、厳密にいうと鴨川ホルモー読書会以外は本の「紹介会」である。

日本最大の読書会「猫町倶楽部」のように課題本を読んできることが参加条件の読書会もあるが、課題本の選定・入手・読む時間等を考えると、現実には全員が同じ本を読んできるのはなかなか難しく、どうしても紹介会形式になってしまう。もちろん本の紹介読書会もそれはそれで十分面白く、得られるものは少なくないのだが「ほーそういう本があるんですか」で終わってしまうことも多い。

以前千里ニュータウンのコミュニティアフェ「さたけん家」で村上春樹、ナンシー関などを課題本にして読書会を開催したことがあり、同じ本について語り、共感したり、読み方の違いについて知る楽しさは格別だった。持参の本を見せ合うと、同じ頁の同じ文に線を引いていて感激したり、男女で読み方が全く違うことに気づかされたりもした。その楽しさを学生と共有したかったのである。

本音をいうと読み手が最低3人いれば会は成立すると考えていた。以前から密かに構想していたのだが、ゼミ4年のTさんに加えて、zoom読書会に参加してくれた農学部のKさんが羽海野チカのファンでかなりの読み手であることが判明し、私とあわせて3人揃ったので実現することになった。

でも3人だけではつまらない、皆に作品の魅力を伝えたい。ということで聞き手を募集したのである。ハチクロは全10巻あり、マンガとはいえ参加者全員が事前に読むのは無理で

ある。しかし、作品そのものが面白く、ファンである読み手が語りあうなら、読み手同士はもちろん、未読の人が聞いても面白いだろうと聞き直った企画ともいえる。

かくして、深く読んでいて語りたい3人の話し手と9人の聞き手が参加する読書会がオンラインで開催された。あらすじ紹介、事前アンケート(好きな登場人物等)発表、そしてパネラートークに続いて自由発言という進行。2時間はあっというまだった。

Kさんによる、登場人物の携帯着メロ「ムーンリバー」についての解釈にはうならされた。Tさんによる、主人公「はぐ」が誰を選ぶかを暗示する扉ページの絵の指摘も鋭かった。私はシーンと文章が並列する表現、シリアスとコミカルが共存することについて話したが、ストーリーや心理描写に関して、学生や二人に比べていかに読みが浅かったかを思い知らされた。

なお、この日のためにKindleで全巻を買いなおした。場面を共有して議論したかったからである。Kindleにはチャプターブックマークがあり何巻のチャプター29といえばiPadですぐにその頁にとんで注目するコマを画面共有しながら話ができる。小さなテーブルでも本を見せあうのはたいへんなので、この点はオンライン読書会の強みと言える。

読書会後のアンケートでは「他の人の意見を聞けて、自分の世界が広がったように思います」「自分では手を出さないジャンルだったので良いきっかけになりました」「ハチクロのシーン毎の解釈がすごかった」などの感想がありうれしかった。ちなみにこの読書会をきっかけにして少なくとも2名が新たにハチクロ全巻を購入している。

文化の継承の場としての読書会

ハチクロは私にとってはついこの間の作品だが学生にとってはそうではない(Tさんは叔母さんから勧められたという)。従って今の学生には通じない表現や話題も多い。今回も「このデフォルメは楳図かずおでしょう」とお

じさん世代ならではの発言をすることになった。また我々世代の本好きなら確実に知っている「本の雑誌」を読書会メンバーは知らなかった。読書会は本の中身についての意見や感想の交換だけでなく、おおげさにいえば世代を超えた情報や文化の継承という意味も大きいのである。(余談だが、最近ヒッチコックを知らない映画好きに何人も出会って愕然としたことがある。昔はTVの洋画劇場で皆なんとなく見て知っていたが今は洋画劇場自体がないからだろうか)。

おわりに・これから

単なる本の情報を得るだけなら他にも手段はいくらでもあるが「こういう人が、こんな本を、こういうふうに読んでいるんだ」から得られるもの・実感・刺激はたいへん大きい。読書会の意味はそこにあると思う。

これまで読書は個人的行為と見なされてきたが、近年本のもつ強力な媒介性に気づいた人々が本を使って様々な新しい活動をはじめているというのが、ここ数年の研究成果であり私の持論であるが、近大読舒会の活動を通じてますますそれを確信するようになった。

本稿では私が参加したものを中心に紹介してきたが、これ以外に学生だけで実施した企画活動も多い。また2019年秋には横浜で開催された図書館総合展にN君、S君が近大図書館活動の代表の一人として参加させていただいた。この時は帝京大学メディアライブラリーセンターの皆さんと交流することができた。最近ではコロナの状況でもなんとかリアル読書会をしようと試験的に青空読書会を洗心の庭で開催している(さすがに11月は寒かった)。

今年で初代メンバーの多くが卒業を迎えるが、今後も次の世代に継承し色々な企画を自分達のペースでやっていけたらと考えている。